

Moses, Man of the Mountain における人間の自由

古谷やす子

Abstract

Zora Neale Hurston's *Moses, Man of the Mountain*, published in 1939, is a retelling of Moses in the Old Testament. The work has received relatively little critical attention. The black literary authorities in 1930-40 rejected it because of the lack of social view points. It was not until her death in 1960 that the work was reevaluated to be one of the great records of Afro-American people, being that Moses in the story was a great leader and hero of the tribe. This paper attempts to change our understanding of Moses to a hero who adventures in his own internal world, rather than an external place like the Biblical Moses.

Hurston's Moses struggles to find the secret of human existence to teach it to the Hebrews. When he crosses the Red Sea from Egypt to the Middle East—that is, from a nation under the rule of man-made laws to a place where he is subject to no law except the laws of “tooth and talon”—he feels free from everything. He learns that humans are free by nature. This freedom is innate to human beings, but it is easily exploited, much like the Hebrews. Once freedom is lost, it is difficult to reclaim, because it cannot be given from others. Instead, it must be taken back by one's own efforts.

Thus, in this work, Hurston shows if freedom means returning to our natural state, humans must individually understand how it should feel. Therefore, freedom is not only from the bond of slavery, but the most important matter that every human must always examine—that they are not controlled by anyone else or by their own desires.

1. はじめに

Moses, Man of the Mountain (以下 *Moses* とする) は、旧約聖書の出エジプト記を語り直した Zora Neale Hurston (1891-1960) の小説であり、1939 年に出版された。Hurston はフロリダ州イートンヴィルという黒人自治区で育った。父は説教師、大工でありその地の市長を三期務め、法律制定にも関わった人で、母はもと学校の先生だった。Hurston の幸せな子供時代は 14 歳のときの母の死で終わるが、イートンヴィルでの経験が黒人を誇りに思い、すべての人間の内奥に潜む尊厳を発掘する欲望に彼女を駆り立てたと思われる。母の死後、子守少女として、また旅回りの劇団の下働きなどをして生活するが、26 歳のとき、Howard 大学の予備校に入り、勉学を始める。Howard 大学で教えていた Alain Locke に文才を認められ、学内の同人雑誌に最初の

短編, “John Redding Goes to Sea” を発表する。文芸サロンに通う間に作品を発表し, *Opportunity* の文芸コンテストに応募した作品が二位を獲得したことがきっかけで New York の Barnard College に入り, Frantz Boas 教授のもとで文化人類学を学び, 南部の民話収集のフィールドワークを始める。

Hurston は 1920-30 年代¹⁾ に, 小説, 民話, 劇を執筆して活躍するが, 本作品は出版当初酷評された。黒人文学を代表する Alain Locke からは「人物画というよりは漫画」²⁾, Ralf Ellison からは「黒人文学に何も寄与しない」³⁾ と批判され, 本作品は忘れ去られた。1960 年に Hurston が亡くなると, 親しい交友関係にあった小説家 Fannie Hurst がこの作品を人種の記憶を語るものとして紹介し (1960)⁴⁾, その後 Blyden Jackson (1910-2000) や Henry Louis Gates Jr. (1950-) などによって見直されるが, それでも本作品は少数の批評家にしか評価されていない。

概ね再評価は Moses を民族の偉大な指導者とすることで民族の誇りを示すもの, またアフリカから奴隷として連れて来られたアフリカン・アメリカンの文化の記録という方向をとっている。1977 年に Hurston の伝記を著した Robert E. Hemenway は次のように述べて, 文化的遺産を賞賛している。

話は傑作だ。Hurston の持つ才能 (その才能は共同体の創造性という特別な遺産を受け継いだものである) を実証するものだが, *Moses* は素晴らしい失敗作だ。作者は黒人の創造的なスタイル, 聖書の風格, 民族のユーモアや伝説を一つのまとまりのあるものにできなかった。この作品は作品が目指した野望の犠牲となり, 作者の次の十年を特徴づけるものとなった。(270-271)

Wright State University の教授であった Lillie P. Howard も, 「Hurston が *Moses* の中で述べたいと思ったことは, 私たちには決してわからないだろう。しかしながら, 言っていることは野心的で, ユーモアがあり, 高貴なものだ」(1981: 132) と述べて Hemenway に賛同している。University of South Florida の Deborah G. Plant は異なる視点で, *Moses* は, 「自尊心と自立が個人のうちに達成されれば, 集団は強くなり国は存続できる」(142) ことを述べるものだとし, それぞれの人間の内にある能力の違いに信頼を置き, 個性の尊重を訴えるものだと評価する。本論は, *Moses* の個人的な能力を賞賛するのではなく, もっと基本的なもの, すべての人間が共通に持っている自由について語ることを検証する。

Hemenway と Howard は Hurston の描く Moses が不可解だとしているようだが, 彼女がこの作品を発表する前に書いた短篇 “The Fire and the Cloud” (*Challenge*: September, 1934) に Moses の人物像を読み解くヒントが見られる。この短篇で, Moses は独りシナイ山に登りトカゲと話をする。昔話や民話では, 直截に表現するのが憚られることを伝えるとき, 動物を使って表現する手法を用いる。しかも大概は真実を伝えるので, 長く語り継がれることになる。そこで作者は旧約聖書の Moses の話を借りて, 自由の重要性について伝えようとしたと考えられる。また, トカゲとの会話で, Moses は, 神がイスラエル人をカナンに導くよう命じたので従ったのだという。「私は, 送られたから行ったのだ。苦しくて無に向かって叫び『どうして私が召命されたのですか “Why am I called?”』と尋ねたが答はなかった。ただ, 『行け』という声があった」

(“The Fire and the Cloud” 119)。この部分は神話学者である Joseph Campbell (1904-1987) が *The Hero with a thousand faces* で説明する「召命」と推測される。Campbell は、人間が自分の無意識の世界に向かって冒険を始めるには何らかの呼びかけがあるとす。彼は、人間の内面に向かって冒険をする人を英雄と呼ぶ。人間のあらゆる欲望を捨て去り、その奥にある人間が生まれながらに持つものを探り出す人のことである。Hurstun は Moses にその役割を与えたと考えられる。

Moses は、旧約聖書に登場する Moses の話である。Moses がエジプトに奴隷とされているイスラエル人を、エジプトから連れ出しカナンの地へと導く。Moses は生まれて数週間後に葦の籠に入れられてナイル川に浮かべられ、エジプトの王女に拾われ宮中で育てられる。あるとき、奴隷が理由なく鞭打たれるのを見て彼は監督官を殺害する。それが原因で彼はエジプトの地を去り、紅海を渡る。そこで Jethro (祭司) に出会い山で修業し、彼の娘 Zipporah と結婚する。Jethro の懇願により Moses はエジプトに戻り、イスラエル人を連れて再び紅海を渡り、カナンの地へと向かう。目的地を目前にして Moses は山の中へと姿を消す。Hurstun の Moses も旧約聖書の話も同じ筋書である。旧約聖書の Moses はキリスト教の神の使いとして、神に選ばれたイスラエル人をカナンに導く。一方 Hurstun の Moses は、自分の内面を覗き人間生得のものを知り、一度奴隷を経験したイスラエル人に人間回復を伝える役割を持つ。当論文に出てくる Moses はすべて Hurstun の Moses であるので、彼はキリスト教の神の使いではない。そこで Moses がいう神をキリスト教の神と考えず、原始宗教の神、自然神と考える方が物語を理解しやすいと考えられる。

本論は Moses を人間回復の物語と捉え、一度自由を奪われた人間が自由を取り戻す方法を考察し、人間回復の意味を探る。まず初めに Moses が、人間は生まれながらに自由であることをいかにして知るのか、また自由とはどのような状態なのかを述べる。続いて自由を邪魔するものとして欲望と依頼心を断ち切らねばならないことについて説く。最後にいくら指導者が立派でも、また、たとえ抑圧者を倒しても、自由は戻らないものであり、自由の意味を知れば人間回復は個人の内面の問題だと分かることを論じる。この分析を通して、人間回復は単に奴隷からの回復を意味するのではなく、人間が生きていくうえで常に個人がなさねばならないものと証明していきたい。人間の根底にあるものを追及し、認識することに人間回復の道を見出す方向は、本作品の新しい捉え方だと考える。

2. 人間に生得のものを知る

Hurstun はこの本の序文において Moses を次のように位置付けている。「Moses は一般的には法律の施与者として敬われているが、そうではないのだ。彼は自分の目で“the back part of God’s glory” (神の栄光のその裏側) まで見てくるのだ」(Moses vii) と述べ、神を通り越してまだ向こうにある永遠の真実を見るために冒険をする人としている。Hemenway も指摘しているが確かに、「Moses の役割はユダヤ教とキリスト教の伝統からはかけ離れている」(260)。本章では Moses の冒険がいかに始まり彼がなにを知るのかを探る。

Moses は出生後間もなく両親からの分離を経験する。Moses は、Pharaoh がイスラエル人に

よる男子誕生を禁じている時代に生まれたため、Pharaohの目を逃れられないと思った両親は、彼を葦で編んだ籠に入れナイル川に浮かべる。昔話において、一度人間の生きる陸地から追い出され川に流されることは死を意味すると考えられている。Mosesは生まれてすぐから死を経験し、生まれ変わって宮中という別世界に移るのである。Mosesは意志の働かないうちから冒険するべく生まれついている。

Mosesの少年時代について聖書には記述はないが、Hurstonが詳しく述べているのは、少年時代の厩番の老人Mentuとの出会いを重要視しているからだろう。学識はないが知恵のあるMentuから人間と自然の有り様を学ぶ(Hemenway 261)。Mosesは好奇心の強い子でなんでも知りたがる。Mosesには父親がいないが、Mentuが父親代りとなりMosesの質問に「物語」で答えてやる。「物語」を聞くことで、Mosesは見知らぬ原初の世界、動物の世界、神話の世界のことなどを体験する。MentuはMosesの成長を助ける役割を担うといえる。そして「『物語』は人間よりも強く、人間よりも長生きする」(Moses 38)と述べられているように、「物語」の中に生き残り続けてきたものを、Mosesは身につける。物語には昔からの人間の知恵が伝えられ、真実を知ろうとするものに手掛かりを与えるものとなる。Mentuはまた、若者に成長したMosesに、馬の育て方や乗り方を教える。自然界と人間界の協力、共存の必要性を教えるのだ。Mentuの庇護性と指導力がMosesの意識を下から支え、彼が危険に出くわした際に、見えない案内役となり進むべき方向を与えるものとなる。

Mentuが死に愛してくれる母も亡くなると、孤立したMosesに危険が迫る。イスラエル人のMiriamが城門に来て、弟であるMosesに会わせてほしいと言いつ彼の出生の秘密を暴いたため、エジプト人として生きてきたMosesのアイデンティティまでが奪われ、宮廷でますます孤立する。以前から奴隷の扱いに異議を呈していたMosesだが、たまたま奴隷が監督に正当な理由もなく鞭打たれる姿を目にし、彼は監督を打ち据え殺してしまう。孤立し自分自身しか頼るものがないときに起こしたMosesの殺人行為は、彼自身の表現である。自分だけになると、人間の真実が現れる。彼の殺人事件は傍目には悪であるが、無実の奴隷を鞭打つ行為が許せない彼の正義の現れであり、この事件は彼をさらに真実を知る道に進めるものとなる。

Mosesはエジプトから逃げて紅海を渡る。戯曲や民話を研究するJosie P. Campbellが説明するように「紅海は彼[Moses]に、『敷居』の役割を果たす。『敷居』はMosesをエジプトの王子という身分から切り離し、人々[イスラエル人]のリーダー」(85)とするのである。敷居をまたいだ途端に、Mosesはエジプト人ではなくなり、高貴な生まれも、Pharaohや宮殿との関係もなくなり、身分もなく友もなく敵もなく、すべてのものから切り離される。彼を拘束する法律もない(Moses 78)。人間の法律から自由になり、ただ自己だけが自然の法に向き合うとき、人間としてとるべき道が自然に示される。Mosesは「自然」から学ぶ旅に出ると考えられる。作者Hurstonが、“crossed over”⁵⁾という語をなんども繰り返し用いていることは、「敷居をまたぐ」ことに重要な意味を与えるものだと考えられる。一度またがなければ、経験してみなければ、人間のあるいは世界の秘密が分からない。それまで住んでいた世界を切り離す意味で、「敷居をまたぐ」行為は「一度、死ぬ」とも表現されている。神話学者によると、普通の人間は決められた境界内にとどまる方が安心だと感じ、そこから出たがらない。なにかと理由を付けて未踏の領域に足を踏み入れようとはしないものだ。“cross over”は後にヨルダン川を渡ること

繋がり、人間回復のための重要なキーワードとなるものである。Hemenway は“cross over”に、Josie P. Campbell が指摘する意味を見出すことはなく、この言葉に本小説のテーマがあるのだらうと示唆するが、「作者が何を“cross over”するのかははっきり述べていないのでわからない」(269)としている。Hurston は Josie P. Campbell が説明するように“cross over”に、実際に境界を越える意味と、内面に向かって奥深く探究する意味を意識して込めたと考えられる。

Moses は“cross over”して、生まれたときの状態、なにも束縛するものがない状態になる。そのときの気持を次のように表現している。「彼 [Moses] は支柱の穴と同じくらい“empty”だと感じた。というのは、彼は以前の彼では全くなくなっていたからだ」(Moses 78)。“emptiness”が人間の生まれながらの状態だという。支柱の穴は上から下まで空洞であり、“emptiness”は邪魔されない束縛されない状況であり、「自由」という言葉で置き換えることができる。作者は Moses に“emptiness”を経験させ、人間はもともと自由で、自由とは生まれたときの状態だと学ばせるのである。一方 Deborah G. Plant は、“emptiness”を「自由」とは解釈せず、あらゆる物や地位を剥ぎ取られた状態として、人間の最低状況と理解する。彼は一番底辺から這い上がらねばならないのだから、Moses を通して、Hurston はあらゆる障害を克服する可能性と必要性を示そうとしたのだと述べる (Plant 130)。Plant は Moses をリーダーにふさわしい力のある人と見て、個人の能力に力点を置き、黒人が民族的に劣るとする白人の偏見に、Hurston が反発するものと主張している (Plant 130)。本論では、“cross over”して“emptiness”を感じることは「自由」を知ることだと解釈する。

Moses は紅海を渡ったのち、ミディアンで聖職者 Jethro に出会い世話になる。この期間、彼はほとんどの時間を山で過ごし、自然と向き合い自然から学ぶ。Josie P. Campbell は Jethro を Moses の第二番目の師であり二番目の父親役として Mentu に続くものと捉える (89)。山と向き合うことは自然と一体になり、生まれたときの状態“emptiness”を経験することだといえる。Jethro と一緒に住む間に Moses は彼から魔法を習い、使えるようになる。Jethro は「我が息子 Moses は立派なブードゥーの師になった」(Moses 114) と語る。ブードゥーとはアフリカに源を発する多神教の原始宗教である。Moses が答を求めて精神修行をすることを考える。Jethro については、Hurston は聖職者としているだけで、キリスト教の聖職者とは書いていない。Hemenway は、Jethro が Moses に一神教を教えると述べているところから、Jethro をキリスト教の聖職者と理解するようである (262)。Hurston は Jethro をキリスト教の聖職者とは限定せず、他人の考えが鏡に写し出されるようにわかる人といい、自然から学び Moses が理想とする人と捉えている。Josie P. Campbell がいうように自然を手本とし、自然を知り自然のままに生きる人として描かれる (90)。Moses が Jethro の娘 Zipporah と愛し合い結婚し愛を知ることも人間の自然の姿である。厳しい自然を学び優しい愛に出会う、両者とも人間の自然だ。Jethro のもとの滞在は Moses に自然であることの重要性を教えるものだ。

人間は自然と向き合っただけで生きるものでなく、人間と向き合わねばならない。そこで Moses はさらなる知恵を得ようと、エジプトの信仰の中心地であったコプトスへ行く。コプトスの川底にはエジプトの知恵の神トトの著した書が不滅の蛇に守られて存在すると語り継がれている。コプトスへの冒険は Joseph Campbell が「人間を変える恩恵」と呼ぶようなものを手に入れるための地下世界への旅の典型だと Hemenway は説明するが (264)、コプトス行きはその

冒険の一部をなすと考えられる。

Moses は紅海を渡ったとき、すべてのものから切り離され生まれたときの状態を経験し、“emptiness”を感じた。それが「自由」だと彼は知った。人間は生まれながらに自由なのだ。すべてを失っても自由だけは残るはずなのに、どうして人間には自由まで失うことが起こるのだろうか。

3. 欲望と依頼心

Hurston は Pharaoh を権力欲の象徴とし、Aaron を他人の力に頼って名誉を得ようとする人として、Miriam を自由を忘れてしまった人として描いている。この章では彼らを詳述することで、人間生得の自由が欲望や依頼心や社会制度によっていかに見失われるかを論証していく。

自然は人間に自由の境地を思い出させてくれる。Moses は Jethro の指導で、山で自然と向き合い修行する。コプトスへの冒険で不滅の蛇と戦い勝利し、蛇に勝てるほどの知恵を得て成長した Moses に、Jethro は Pharaoh のもとに奴隷とされているイスラエル人を助け出すように依頼する。エジプトからイスラエル人を連れ出すことは、一度人間であることを否定された人たちを、人間の状態に戻すことである。今の生活に満足する Moses は依頼を断り続けるが、あるとき山に入り彼の中に変化が生じる。神が現れて、掴むと木の杖になり置くと生きた蛇になる魔法の杖を与える。蛇は彼が得た知恵を意味すると考えられ、知恵が彼の杖となって力を与えるのだ。彼は山での修行により人間の自由は侵されてはならないものと確信し、奴隷の存在は許しがたいという正義心から Jethro の依頼を受入れ、イスラエル人を奴隷状態から救済し彼らに自由を取り戻す手伝いに出かけるが、困難がつきまとう。

最初の困難は人間には欲望がついて回ることだ。Aaron が Moses に随伴することに象徴されている。Aaron は聖職者として神から選ばれたと自負し、イスラエル人の指導者を自任する。Josie P. Campbell によれば、「Aaron は彼が指導者として知られ恐れられることしか頭になく、しかも自分の行動の責任は回避する人」(87)であり、そのとおり彼は物欲と名誉欲ばかりの人間である。また Aaron は神と Moses に頼るだけで、自分で努力をしない。Aaron が最終地のヨルダン川の手前まで Moses と一緒に居ることは、Moses のように知恵を得た人間にも物欲、名誉欲が付きまとうことを物語る。Moses には要求するばかりの Aaron が理解できない。Aaron が Moses にとって邪魔者であることは、欲望が人間回復の邪魔をすることを表す。

依頼心も人間回復の邪魔をする。Moses は Aaron が次のように言うのを聞いて、イスラエル人がいかに預言者 Miriam に頼って生活しているかを知る。「私の妹 Miriam は立派な予言者で、彼女の影響は凄いものだ。彼女がいなければ我々はやっていけない。みんなが彼女に善悪を聞きにくる。彼女には呪術の力がある」(Moses 135)。Moses はまず Miriam に頼るのを止めさせるために、彼らに法を教え、供え物は不要で祭壇に仕えるより正義を守ることを教え、自由は神が与えてくれるものではなく、簡単に手に入るものでもない次のように説く。

雷鳴が聞こえて自由になるだろう。Pharaoh が命令を出せば自由になったと思うだろう。ここから出て行進すれば自由だと思うだろう。だが、様々な苦しみを味わったのち、山か

ら雷鳴が聞こえたとき、もし君らに勇気があれば本当に自由になれるのだ。(*Moses* 138) (下線筆者)

失った自由はひとりでに戻ってくるものではない。頼ることを止めて、勇気をもって自ら取り返しに行かねば戻ってこないとこの作品は伝えている。

自由を取り戻すためには必死に戦わねばならない。Pharaoh (Ta-Phar) との熾烈な戦いは、Moses がイスラエル人に自由を取り戻すことがいかに難しいかを伝えるものである。Pharaoh はまさにイスラエル人から自由を奪った張本人である。Moses は完全に Pharaoh を倒さねばならない。

彼 [Pharaoh] が憤然と立ちあがって真っ逆さまに倒れることが起これば起こるほど、すなわち私が彼を完全に倒せば、ますます人々の信頼が厚くなる。そうするのは、皆を連れ出すためだけではないのだ。そののち、皆に役立つことになるからだ。それが本当の狙いだ。もし、Pharaoh がイスラエル人を平和的に解放すれば、6 か月もしないうちにイスラエル人は戻って Pharaoh に仕えるであろう。私があなた方の国を作るなら、あなた方は永遠に自由でなければならないのだ。(Moses 147)

Pharaoh は、自分の権力欲のために他人の自由を奪う欲望の塊であり、自由を得るには完璧に欲望を叩き潰さねばならないという意味がここで合わせて示されている。

Pharaoh は Moses の一側面である。Moses は人間には二つの面があることに気づいているが、Pharaoh は気づいていない。Pharaoh にも正義の面が必ず存在する。Moses は Pharaoh に気づいてもらいたくて、

神は醜悪を愛さない。神は君にそれを分からせようとしている。君は約束をしておきながら何回も裏切るので、私は新しい禍を君に送らねばならなくなるのだ。世の中には虚栄や復讐より大きなものがあることをどうして分かってくれないのだ。(Moses 167)

と語りかけるが、Pharaoh の欲望を一つ抑えつけてもまた生え出てくる。欲望はなんとかして生き延びようとする。

欲望を倒すには恐ろしい手段が必要となる。Moses が Pharaoh を負かすために用いた最終手段は、エジプトに生まれた第一子すべてに死を与えるという残酷なものだ。Moses は Pharaoh が悲しみに暮れている間にイスラエル人を率いて紅海を渡る。Pharaoh と彼の軍隊は追跡するが、波に吞まれ全滅する。こうして Moses は Pharaoh という悪を打ち負かす。彼が紅海を渡ったのは二度目である。「今こそエジプトに戻り王になれるではないか。イスラエル人は解放されたのだから、責任は果たしたはずだ」(Moses 194-5)。打ち負かしたはずの彼自身の欲望がまた、彼の進路に立ちはだかる。人間である以上、欲望は常に誘いかけるが、初めて渡ったときの“emptiness”の経験が心にしっかり刻み込まれ、欲望が起こるときいかに判断すればよいかを身に着けている。

Mosesのように一度“emptiness”を経験した者は、欲望と依頼心が自由の邪魔をすることを知っているが、欲望と依頼心を無くせば自由がひとりで返って来るのだろうか。

4. 人間回復——自由を取り戻す

自由を奪う Pharaoh を滅ぼしたからといってイスラエル人が自由になるわけではない。単に抑圧者から解放されることが自由ではないとこの物語は伝える。Moses は、長く奴隷状態を経験し人間として生きる意味を知らないイスラエル人にこれから教えねばならない。

イスラエル人は、神に頼ることを常とし、Aaron を神に選ばれた人として彼の言うことに耳を傾ける。彼らはどこか外に神を求めている。人間は一人ひとり独立したものであり各自がそれぞれの神に問いかけて答えを引き出さねばならないとは考えず、彼らは神の方から手を差し伸べて助けてくれると信じているように見える。休息地の水が苦くて飲めないとき、イスラエル人は Moses を残忍な言葉で責め、目には敵意を見せる。イスラエル人は、自由の身であることを耳で聞いて知っているが、自由には責任が必要なことまではまだ学んでいないため、すべてを Moses の責任に帰す。そこで Moses はイスラエル人に次のように教える。

君たちは自由を求めるためにここまでやって来たのだと思ったが、バーベキューを求めているのか。自由とは神が下さったもっとも大事なもので、空腹ごときで自由を手に入れるのを君らがあきらめるとは思わなかった。(Moses 205)

Moses は、なぜ彼を信じてくれないイスラエル人を導くのだらうと思いつつ、彼のなかにある正義感に後押しされ、彼らを導かざるを得ない。彼らは責任を Moses に押し付け、与えられるのを待つだけだ。つまり彼らは人間であることを忘れている。

Moses は人間であることは美しいことだとイスラエル人に教える。Moses のシナイ山麓での妻 Zipporah との再会は、彼には喜びを、イスラエル人には感動を与える。彼女は美しく着飾り、立ち居振る舞いもイスラエルの女性が息をのむほど優雅である。Josie P. Campbell は Zipporah を、「ほとんど一緒に住むことはないが生涯彼のオアシスとして存在する」(89) と説明する。Miriam も Zipporah と同じように女性であり、美と愛が与えられているが、彼女は彼女の資質であるはずの愛を認識しようとはせず、Aaron と共に「官位と名誉」(Moses 213) に拘る。Miriam は奴隷状態の厳しさゆえに、美も愛も忘れてしまったように思われる。彼女は子供のとき、エジプトの王女を見て純粹に心ときめかしたのに。人間が愛や美に出会い感動するのは自然な反応であり、本来備わっているものである。Zipporah の来訪はイスラエル人に本来の人間を思い出させる役割がある。

師と仰ぐ Jethro の訪問は Moses に自信を与えるものである。Jethro は小さな問題には関わらず人々と神の間に立つ人として働くよう Moses にいい (Moses 223), Moses を自分の後継者と認める。Josie P. Campbell も指摘するように、知ることだけでは不十分で、考えることが人間には重要なのだ (91)。Jethro は Moses が、知るだけでなく考えて行動できるまで成長したことを認めたようである。自然から学び山で考え、十分に存在の意味を会得したものと認めるのである。

Moses は Jethro に認められると、「存在そのものに抱かれたように感じる」(*Moses* 223) という。彼は過去、現在、未来、という宇宙の法則を体得する。Jethro の役割はここで終わり、Moses の成長に安心して帰路に就く。

Moses の仕事はここで全うされたかにみえるが、イスラエル人に自由とはなにか、人間として生きるとはどういうことかをまだ教えられていない。Moses は 40 日間山に籠り考え、力を得ようとする。ところが Moses の留守中 Aaron は、イスラエル人を扇動し、彼の二人の息子と Miriam と共に金の牛を祭壇に祭り浮かれ騒ぎ、懸命に物や他人に頼らず、自己を見つめるよう指導する Moses の努力を踏みにじる。Aaron が物欲と名誉欲にまみれていることを Moses は知っていたが、イスラエル人に力を持つ Aaron を切り捨てることはできない。Aaron を切り捨てることはイスラエル人を放棄することにつながるからである。そこで彼の息子だけを切り捨て処罰する。Moses は罰を与えることで、イスラエル人に自分で考えずに神に頼ることの非を教えるのである。

奴隷制は自由の意味を忘れさせる。イスラエル人の経験した奴隷状態とは、人間であることを否定されることである。この物語の中では、人間とは自由であることだと繰り返し主張されている。自由を否定されている間に、自由の意味が分からなくなることもある。Miriam はその一人である。彼女は Moses をナイル川に浮かべたとき、エジプトの王女を見て憧れを抱く。それは彼女の奴隷制に汚される前の純粋な心の発露なのだが、奴隷を経験して彼女の純粋さは変化する。Moses の妻 Zipporah が野営地に現れると、Miriam は Zipporah をエジプトの王女のイメージに重ね合わせるが、彼女を称賛する気持ちはない。Zipporah の出現は、預言者としてイスラエルの女性の長を自負する Miriam の地位を脅かすものと Miriam は感じ、Zipporah の肌の色が黒いことを理由に、イスラエル人の血と混じることは許せないと言い、また肌の黒い人に治められたくないと主張し、イスラエル人女性を扇動して、Zipporah を追い出すよう Moses に要求する。Moses は怒り Miriam を群衆の面前で罰する。Miriam は「Moses が彼女を彼女自身の身体の中に閉じ込めた」(*Moses* 263) と表現する。ここで彼女は内面への旅を Moses から後押しされているのだが、理解できず尻込みする。Miriam の次の言葉は、奴隷経験者の解決方法のない現実を語る。

「自由」とは考える以上のものだ。皆が欲しいというのだから良いものに違いない。多分、私は幸せでなかったので、自由をどう扱えばよいのか分からなかったのだ。そのことを話しに来たのではない。ここに来たのはもう死なせてほしいと頼みに来たのだ。(*Moses* 262)

Miriam の純粋な心が奴隷を経験することでいかに変化したか、また奴隷制が彼女に自由を完膚なまでに忘れさせ、自由を理解できなくしたかがわかる。

Aaron は奴隷の心 (slave-mind) が抜けないイスラエル人の代表である。Miriam は自由について考え始めるが、イスラエル人は他人の言いなりで、深く考えずに Aaron に従う。この状況を Josie P. Campbell は次のように分析する。「Aaron は隠し立てをし、二枚舌を使いあらゆる機会に Moses を裏切り、自由になってもこのような荒野に連れてこられるより、エジプトで奴隷であったときのほうが良かったのではないかと行って Moses に反旗を翻すようイスラエル人を

扇動する」(87)。Aaron の扇動に従うイスラエル人を Moses は、奴隷の心の抜けない臆病者だといひ、奴隷の心を退治することがカナンに入る絶対条件だと次のように主張する。

彼ら[イスラエル人]は臆病者だ。奴隷の心を持つものは誰一人約束の地に入れぬ。〔中略〕
彼らの子供なら立派な人間に育てることができるが、彼らは駄目だ。彼らにも立派になるための芽はあるので、彼らのために、私と世界と神と私は戦おう。だが彼らには運命を受け入れてもらわねばならない。奴隷の心を持つものはこの荒野で消耗して死ななければならない。(Moses 259)

彼らの子供なら奴隷の心が抜けるだろう。これから40年、奴隷を育てるのではなく人間の男女を育てるようにイスラエル人に申し渡す。まず奴隷の心がなくなる限り自由を手に入れることはできないことを説くものである。

奴隷の心を無くすまで自由は得られず、したがって人間には戻れないと Moses はいう。奴隷の心がなくなるまで時間がかかることは仕方がないが、努力をすれば必ず取り戻せるものだ。奴隷経験のない若い世代のイスラエル人に Moses は次のように教える。

自由とはおかしなものだ。自由は岩や丘のように永遠にそこにあるものではない。それはちょうどマナ⁶⁾のようなもので、毎朝、新たに集めねばならない。もし、怠れば、ある日、二度と手に入らないことに気づくだろう。〔中略〕君たちは Pharaoh というエジプト人の抑圧者から自由になった。君たちの中に決して抑圧者を出さないよう気を付けるがいい。(Moses 268)

Moses は、自由が何であるかを教え、失わないように気をつけねばならないが、失ったときは必死に戦って取り戻すようイスラエル人に教える。奴隷の心を持つ限りすなわち自立しないあいだは、自由を得ることはできない。

Moses は最後に他人の力ばかりを頼る Aaron を亡きものにする。このときまでに奴隷の心を持つ世代は Aaron 以外すべて死に絶えている。自由と正義に Miriam は気づいたが勇気がなくて死を選んだ。一方、Aaron は考えることをせず欲望しかみない。自由について考えない者は約束の地に入ることはできない。「この国を偉大なものにしようとするものは、すべて生きながらえることはできないのだ」(Moses 275) と言ひ、Moses は彼を殺す。Aaron は欲望の象徴として描かれるのだが、Moses は彼自身ももしかしたら Aaron のようであったかもしれないと考える(Moses 275)。人間は考えなければ、Aaron のように、あるいは Pharaoh のように生きることもある。

自由は自己を解放するとき手に入れることができる。ついにイスラエル人はヨルダン川に着く。渡れば約束の地、自由の地である。Moses は彼らをそこまで率いてきたが、渡ることはしない。彼はシナイ山に登り、渡る (cross over) ことは、それぞれが個人の力でしなければならないと考える。彼の意見は次のように述べられている。

彼 [Moses] は完璧な人々を作ろうとしてきた。自由で、公正で、高貴で、強い人々、それこそ時を越えて世界の光であるべきものだ。彼が成功したかどうかは分からないが、彼には分かったことがある。それは、誰も他人を自由にすることはできないということだ。「自由」とは内面のものだ。外に見えるものは、個人の内面のしるしあるいは象徴に過ぎない。自由になるための機会は与えられても、人は自分自身で自分を解き放たねばならない。(Moses 282)

先に述べたとおり、自由が生まれたときの状態であるなら、自由は自分の内にあり個人が感じるものである。人から与えられるものではないことがわかる。自己を解放する (make his own emancipation) について Hemenway は、「この解放の思想が *Moses* の主要なテーマである。歴史的には奴隷とされていたイスラエル人を神の使いである *Moses* と同一のもの、すなわち神に選ばれた民とみなす意味であるが、Hurstun が彼女の時代に伝えるものは、自由は自己によってのみもたらされる」(268-269) と解説しているが、Hurstun は前半部の意味を必要とせず、自己を解放することの重要性のみを述べていると考えられる。自分の力で“cross over”することと“his own emancipation”をすることは、自由を得ることを表す同義語として使われている。

ここで *Moses* は役割を終えて、山の反対側へと去っていく。彼は永遠の命を得て自然と同化し自然界の中に帰って行くのである。*Moses* はイスラエル人から依頼心がなくなるのを見届け、自立できると確信し去っていく。彼は自由を取り戻すことがいかに難しいことかを教え、しっかり人間であれ、しっかり自分で自由を掴み守れと教えたのである。

5. 結び

ここまで、一度人間性を否定されたイスラエル人を *Moses* が指導し、自由という人間の尊厳を回復するにはどうすればよいかを述べる物語として *Moses, Man of the Mountain* を分析した。まず本論では *Moses* を人間の内に向かう冒険者と捉えたところに、他とは異なる視点をもった。“Cross over”で始まった彼の冒険は *Moses* に“emptiness”を感じさせ、彼はそこで生まれたときのなにかからも束縛されない状態、自由こそ本来の人間の姿だと認識した。*Moses* は自然と向き合って自由な状態を常に経験するよう努力した。自由は生得のものであるが搾取されやすく、イスラエル人のように気づかぬうちに奪われて忘れ去られるものでもあった。彼らに自由を取り戻すために *Moses* は彼らの自由を奪った *Pharaoh* を倒すが、奪った者を倒してもイスラエル人は自由だと感じず不自由を訴えた。自由は他人から与えられるものではなく、自由が生まれたときの状態なら、個人が感じなければならぬものだったのだ。欲望や依頼心を取り払い、生まれたときの状態になったとき自由を知ることができると *Moses* は示した。自由は自分の内に存在し、外にあるものではなかった。キリスト教世界に知られている *Moses* を偉大な神の使いとせず、自立した力と意志の強い人間とし、人間は欲望や依頼心を取り除き勇気をもって自分の内面を探り真実を知り、自分の得たものを社会に及ぼす役割を果たさねばならないと、この物語は主張した。また、*Aaron* と *Miriam* を最後まで *Moses* と並行して描くことで、奴隷制は取り戻せないほどに自由を損なうものだと伝えた。

Moses は生まれて数週間後に葦の籠に入れてナイル川に流されたため、彼の人生は一度自然に帰ることから始まった。その後、自然は Moses の人生における師であり続け、彼は自然から学び自然の中で考え知恵を得た。彼の宮廷での生活は、昔の人が自然から学んだ知恵を伝える物語を友としたことで支えられた。紅海を渡り Jethro に会うと、Jethro の指導で山に入り修行を積んだ。Moses はイスラエル人救出にエジプトへと向かい、仕事を終えた後、自然の中へ消えて行った。Moses は常に自然と共に生き、人間は自然の法則に従って生きるのが当然だと教えてくれた。自然には人間を生まれたときの自由な状態に連れ戻す役割があったといえる。

人間は生得のものとして自由を持ち、それを失えば人間ではなくなった。Pharaoh を倒さねばイスラエル人は自由になれなかったが、Pharaoh を人間の持つ欲望の象徴とみると、人間は欲望を退治しなければ自由になれないと言い換えられた。Pharaoh はまた Moses 自身の一面でもあるとされた。人間には自由と欲望が共存しているが、欲望を取り除かない限り自由は分からない。

自立した人間にしか自由は分からない。自由とは人から与えられるものではなく、自分の内に自分が感じねばならないものだったので、頼ることしか知らないイスラエル人には理解できなかったのである。作者 Hurston は、人間の尊厳を伝えるために Moses を用いたが、Aaron と Miriam に奴隷制の悪を具現した。Aaron をイスラエル人を代表する者とし、奴隷の心の抜けない者とした。奴隷制は自立を妨げるばかりか、自由の意味を分からなくさせた。Aaron は最後まで自由の意味に気づかなかったので、Moses は彼を殺す以外仕方がなかった。一方、Miriam は、公衆の面前で Moses に罰せられて以後、独りになって考え始めるが、自由とは良いものだろうとは思うものの、いくら考えても分からず、苦しくて死にたいといった。彼女は奴隷制の犠牲となってしまった。奴隷制は人間に自立心を失わせ、また自由は存在しないもののように思わせたのだった。

Moses はイスラエル人に、ヨルダン川は自分で渡るように言い渡した。人間回復とは自由を取り戻すことであり、自由が生まれたときの状態を示すなら、自由とは個人が感じるものであり、人から与えられるものではないことが納得できる。そのように理解すると、人間回復は黒人だけに適用されるものではなく、すべての人間が常に考えねばならないことであると、この作品が示したといえる。

旧約聖書の Moses のあらすじを借りて、Hurston は人間回復の物語を作りすべての人に、人間とは生まれながらに自由なのだが、自分で守らなければ自由は奪われてしまうことを語り継いでほしいと思ったのであろう。人種に関係なく人間が共通に持っているものを取り上げ追及したところに、彼女の偉大さがある。1960年代に人権運動が盛んになり始めるまで彼女のような作家は生まれなかった。出版当時の批評家は、黒人の問題を社会現象として取り上げ、人間の問題として見るのが少なかったので、深く人間を追及する彼女の作品を理解することができなかったのではないだろうか。この作品を、すべての人間は生まれながらに自由であり、自由が生まれたときの状態であるなら、自由とは個人が感じるもので、人から与えられるものではないと分析した。その結果、人間回復は黒人だけに適用されるものではなく、すべての人間が常に誰かにコントロールされていないか、あるいは自分の欲望に操られていないかを考えねばならないこととして、現代社会にも問題提起をするものではないだろうか。

註

- 1) 1910年半ばから1930年半ばにかけては、ハーレムルネサンスと呼ばれる黒人文化の栄えた時代である。この時代を一つの思想で表現することは難しく、さまざまな思想が混在したが、Du Boisの「二重意識」の問題が時代の底流となっていたことは確かである。概ね20年代は自己認識や人種のプライドなどあらゆる可能性を求めて著作が成されたが、大恐慌以後、30-40年代は黒人の直面する状況はさらに厳しくなり抗議文学一辺倒になった。(Oxford Companion to African American Dictionary, 1997)
- 2) Alain Locke は, “Dry Fields and Green Pastures” (Opportunity 1, 1940) と題して当時の黒人文学を論じ、ロマンティシズムと創造的なリアリズムの傾向のうち、彼自身は, “the romantic art of the green pastures” より、たとえ干からびた草原や焼け焦げた土地であっても彼らの社会的危機を表す “the realistic art of the dry fields” の方に賛同する。この評論の中で Locke は民族の優れた肖像画として Moses をもっと立派で英雄らしく書くべきだと述べ、この作品を caricature だと酷評した。“Green Pastures” とは、1936年に制作された聖書に題材をとるキャストがすべて黒人の映画である。監督は Marcus Cook Connelly.
- 3) Ralf Ellison, “Recent Negro Fiction”, *New Masses* V. 40, August 5 (1941), p.24.
「Moses, Man of the Mountain は、伝記小説で、Moses の人生をアメリカの黒人の目で捉えて著されたものだ。ユダヤの伝説では Moses は法律施与者であるが、Hurston は魔術師とした。この作品は、“The Green Pastures” がエホバのために書かれたように、Moses のために書かれているが、黒人小説に貢献するものではない」
- 4) Gloria L. Cronin, *Critical Essays on Zora Neale Hurston* (New York: G. K. Hall, 1998), p.15.
- 5) “Moses had crossed over. He was not in Egypt. He had crossed over and now he was not an Egyptian. He had crossed over. The short sword at his thigh had a jeweled hilt but he had crossed over and so it was no longer the sign of high birth and power. He had crossed over, so he sat down on a rock near the sea shore to rest himself. He had crossed over so he was not of the house of Pharaoh. He did not own a palace because he had crossed over. He did not have an Ethiopian princess for a wife. He had crossed over. He did not have friends to sustain him. He had crossed over. He did not have enemies to strain against his strength and power. He had crossed over. He was subject to no law except the laws of tooth and talon. He had crossed over. The sun who was his friend and ancestor in Egypt was arrogant and bitter in Asia. He had crossed over. He felt as empty as a post hole for he was none of the things he once had been. He was a man sitting on a rock. He had crossed over.” (Moses 78) (下線は筆者)
- 6) 昔 Israel 人が Moses に率いられ、エジプトを脱出して荒野を通るとき、神から授けられた食物。

テキスト

Hurston, Zora Neale. *Moses, Man of the Mountain*. 1939. New York: HarperCollins, 1991.

参考文献

- Campbell, Josie P. *Student Companion to Zora Neale Hurston*. Connecticut: Greenwood Press, 2001.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a thousand faces*. 1949, New Jersey: Princeton UP, 1973.
- Cronin, Gloria L., ed. *Critical Essays on Zora Neale Hurston*. New York: G. K. Hall, 1998.
- Ellison, Ralf. “Recent Negro Fiction”, *New Masses*, V. 40, August 5 (1941): 24.
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston*. Illinois: Illinois UP, 1977.
- Howard, Lillie P. *Zora Neale Hurston*. Boston: Twayne Publishers, 1981.
- Hurston, Zora, Neale. “The Fire and the Cloud.” *The Complete Stories*, New York: HarperCollins, 1995. 117-121.

King, Loyal. *The Cambridge Introduction to Zola Neale Hurston*. New York: Cambridge UP, 2008.

Locke, Alain. "Dry Fields and Green Pastures," *Opportunity* 1 (1940): 4-7.

Plant, Deborah G. *Every Tub Must Sit on Its Own Bottom*. Illinois: Illinois UP, 1995.

キャンベル, ジョセフ 『千の顔をもつ英雄』, 上・下, 平田武靖・浅輪幸夫監訳, 人文書院, 2004年。

ヘメンウェイ, ロバート・E 『ゾラ・ニール・ハーストン伝』, 中村輝子訳, 平凡社, 1997年。